

アルバート街の子供たち

アナトーリー・リュバコフ 長島七穂訳

1



アナトーリー・リュバコフ
アルバート街の子供たち 1
長島七穂訳

1990年 5 月20日 印刷

1990年 5 月31日 発行

発行者 小熊勇次

発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15

電話 814-0131(営業) 815-9181(本社) 振替 東京0-195132

本文印刷所 平文社

扉・表紙・カバー印刷所 栗田印刷

製本所 鈴木製本所

© 1990 in Japan by Misuzu Shobo

Printed in Japan

ISBN 4-622-04539-7

落丁・乱丁本はお取替えいたします

第

江苏工业学院图书馆
藏书章

アルバート通りのいちばん大きな建物は、いまではプロートニコフ横町とヴェスニナー通りと呼ばれているニコリスキー横町とデエーネジヌイ横町のあいだにある。きゆうくつそうに並んだ八階建ての三棟からなる建物があるが、通りに面した最初の建物の外壁には、白い釉薬をかけたタイルが張られ、「カットワーク」「吃音矯正」「性病および泌尿器科病院」等々と書かれた看板がかかっている。角がブリキでおおわれた低いアーチ型の通路が、奥行のあるふたつの内庭をつないでいる。

サーシャ・パンクラトフは家を出ると、スモレンスカヤ広場のほうへ左に曲がった。『アルバートのアル

1

ス』映画館のわきを、もう娘たちが連れ立ってそぞろ歩いていた。コートの襟を無造作にたて、口紅を濃く塗り、まつげをカールさせたアルバート通りの娘たち、ドルゴミローフ通り、プリュシーハ通りの娘たちは、人待ち顔に眼をきらきらさせている。首に巻いた色物のスカーフは、アルバート街の娘たちの秋のおしゃれのポイントである。ちょうど映画が終わったところで、内庭のほうから館外に出てきた観客は、狭い出入口からひとかたまりになって通りに押し込まれた。出入口のあたりには、ここら界隈を根城にしている十代の少年たちの陽気な一団がたむろしていた。

アルバートの一日が終わろうとしていた。車の通るところはアスファルトで舗装されていたが、市電の線路のあいだは石ころが敷かれたままの道を、昔ながらの四輪馬車を追い越しながら、ソ連産の初めての自動車「GAZ」や「AMO」が走っていく。一台か二台の連結車をつけた市電が走っているが、大都市の交通難を解消するには、あまりにも頼りない。地下ではすでに第一号の地下鉄線の工事が始まっていて、スモレンスカヤ広場のたて坑のうえには、やぐらが突き出て

いた。

カーチャはサーシャを「カウチューク」工場のクラブわきのデューヴィチエ原で待っていた。頬骨の高い灰色の眼をしたステツプ育ちの彼女は、田舎風の太い毛糸で編んだセーターを着ていた。かすかにブドウ酒のおいをさせている。

「女の子たちと赤ブドウ酒を飲んだのよ。お祝いはしないの?」

「どんな?」

「どんなって……聖母祭よ」

「へえ……」

「へえ、だなんて言って……」

「どこへ行こうか?」

「どこって、友だちのところよ」

「なに買ってたらしい?」

「おつまみはあっちにあるから、ウオッカを買って」

ポリショイ・サヴィンスキー横町を行き、酔っ払いの話し声や、調子っぱずれの歌声、アコーディオンや蓄音機の音の聞こえてくる古ばけた労働者宿舎のわきを通り、工場の木製の塀の間の細い抜け道を通ってふ

たりは河岸通りへ下っていった。左手にスベルドロフ工場とリーベルス工場の大きな窓が連なり、右手にモスクワ河、前方にはノボデューヴィチ修道院と環状鉄道の鉄橋があり、そのうしろには沼地と草原のコーチキとルジニキーがある。

「いったいどこへ連れていくつもりさ?」

「どこって……。どこでもいいから、ついてくればいいじゃない」

彼が彼女の肩を抱くと、彼女はその手を払いのけようとした。

「まだだめよ」

サーシャはさらに強く彼女の肩を抱きしめた。

「あばれるなよ」

漆喰の塗られていない四階建ての建物がひっそりと立っていた。ふたりは両側にずらっとドアの並んだ、薄暗い長い廊下を通っていった。いちばん奥のドアのまえでカーチャは言った。

「マルーシャの所に男の人が来てるけど、なにもきかないでよ」

ソファアのうえに、壁のほうを向いて男が寝ていた。

窓際に座っていた十歳か十一歳ぐらいの男の子と女の子は、ドアのほうを振り向いてカーチャにあいさつした。部屋のすみの、洗面台のわきの調理台のところで、カーチャよりはるかに年上の、やさしい、人の良さような顔をした、小柄な女性が立ち働いていた。マルーシャだった。

「さんざん待ったのよ。もう来ないのかと思っていたわ」と彼女は手を拭いてエプロンを外しながら言った。「どこかで飲んでいるんじゃないかって……。ワシーリー・ペトロウイチさん、起きてください、お客さんが見えですよ」

しかも面のやせた男は、立ちあがると薄い髪をなでつけ、眠気を追い払うように手のひらで顔をこすった。ワイシャツの襟はしわくちゃで、ネクタイの結び目がゆるんでいた。

「ほかほかのピローグだったんだけど」と、マルーシャはテーブルにのっていたライ麦粉のピローグの布巾を除けた。「これは大豆入り、これはジャガ芋入り、こっちはキャベツ入り。トーマ、お皿を並べてちょうだい」

女の子はテーブルに皿を並べた。カーチャは上着を脱ぐと、食器戸棚からナイフとフォークを出し、さっそく食卓の準備にかかった。勝手を知っていて、ここには何度も来たことがあるらしい。

「部屋を片づけて」とカーチャはマルーシャに言った。「お昼のあと、ぐっすり眠っちゃったのよ」と、マルーシャは椅子に掛けてあつた服をしまいながら言い訳した。「それに子供たちが紙を切り散らかして。ヴィーチャ、紙を拾いなさい」

床をはって、少年は紙くずを集めた。

ワシーリー・ペトロウイチは、洗面台で顔を洗って、ネクタイをきちんと直した。

マルーシャは、ピローグをそれぞれ一切れずつ子供たちに切りとってやって、窓のところに置いた。

「さ、お食べなさい！」

ワシーリー・ペトロウイチは、ウオッカを注いだ。「お祭りに乾杯！」

「じゃんじゃん飲みましょう」。カーチャは、サーシャのほうは振りかえらずに、みなを見まわした。彼女が、彼を自分の知り合いのところへ連れてきたのは、はじ

めてのことだった。ここではウオッカを飲んだりしていたのに、彼とは赤ぶどう酒しか飲んだことがない。「よくもこんなにハンサムな、黒い瞳をつかまえたものね!」。マルーシャは、サーシャのほうへあごをしゃくって陽気に言った。

「黒い瞳に、巻き毛のね」と、カーチャは笑いながら言った。

「髪は、若いときには縮れていても、年をとれば抜けてくる」と、ワシーリー・ペトロヴィチは言って、またウオッカのビンに手を延ばした。サーシャはもう、彼の気難しさを意識しなくなっていた。彼のおしゃべりは、みなと打ち解けたいという気持ちからだ。マルーシャも、やさしく包み込むようなまなざしをふたりに向けていた。

サーシャは、マルーシャの心づかいを嬉しく思い、町はずれのこの家や、隣の部屋から聞こえてくる歌声やアコーディオンが気に入った。

「どうして召し上がらないの?」と、マルーシャが尋ねた。

「ありがたい、いただけてますよ。おいしいピローグ

ですね」

「ちゃんとした材料さえあれば、こんなんじゃないのができるんですけどね。イースト菌さえ手に入らないんですもの。ワシーリー・ペトロヴィチさんが持ってきてくださったおかげよ」

ワシーリー・ペトロヴィチは、イースト菌のことなどにか真面目くさったことを言った。

子供たちが、ピローグのおかわりを要求した。

マルーシャは、また一切れずつ切り分けてやった。

「あんたたちのためだけに作ったと思ってるの? さあ、もうごちそうさまして、顔を洗いなさい」

彼女は、子供たちの寝具を用意して、部屋から隣へ持っていくた。

子供たちは寝に行った。ワシーリー・ペトロヴィチも帰り支度をはじめた。マルーシャは、彼を見送りに出るとき、カーチャにこう言った。

「洋服ダンスの中のきれいなシーツを使つてね」

「彼女は どうしてあんな男とつきあっているんだい?」と、サーシャは、マルーシャがドアを閉めて出ていくときいた。

「だんなが養育費の支払いをしようとしなのよ、姿をくらましちやうて。でも、生きていかなくちやならないでしょ」

「子供がいるのに、男と？」

「すきっ腹をかかえてろっていうの？」

「あの男、年じゃないか」

「彼女だって若くはないわ」

「じゃ、なんで結婚しないんだ？」

彼女は、彼の方を横目づかいに見た。

「じゃ、あなたはどしてわたしと結婚しないの？」

「きみは結婚したいのか？」

「したいけど……。もうよしましょう。さ、寝ましようよ」

こんなのは、めずらしいことだった。いつもは、まるではじめて会ったみたいに、彼女を説得するのはむずかしいのに、今日は、自分から寢床をのべ、服を脱いでいる。彼女は「電気消して」とだけ言った。

そして、彼の髪の毛に指をからませた……。

「あなたは強いわ。きつと女の子たちにもてるのでしようね。でも、不用心ね」。彼女は彼におおいかぶさる

ようにして、目をのぞきこんで言った。「子供ができても平気なの？」

遅かれ早かれ、予想されることだった。子供は、彼にも、彼女にも要らないのだから、そうとなれば中絶ということになる。

「妊娠したのか？」

彼女は、自分の人生の不幸や不運から逃れるかのようにな、彼の肩に頭をうずめて、しがみついた。

彼女に関して、確実に知っていることなんかあるだろうか？ いったい、どこに住んでいるのだろうか？ おばさんの家？ 寮？ 部屋を借りてる？ 中絶なんてことになつたらどうするのか。彼女は家の人にとんなふうに説明して、職場にはどういふ病欠の届けを出すというのか？ もし、もう中絶が手遅れだとしたら？ 子持ちの彼女が、身を寄せられるような所があるのだろうか？

「そういうことになつたんなら、産んだらいいよ。結婚しようよ」

うつむいたまま、彼女はきいた。

「赤ちゃんに、どういふ名前をつける？」

「まだ先の話なんだから、そのときに決めよう」
彼女はまだ笑い声を立てると、彼から身を引きはなした。

「あなたは、結婚してくれないし、わたしだって、あなたとは結婚しないわ。あなたはいくつ？ 二十二歳？ わたしはあなたより年上よ。あなたは教養があるけど、わたしは六年勉強しただけよ……。いずれ結婚はするけど、あなたとはしないわ」

「いったい、だれと結婚する気かい？ 聞かせてもらおう」

「聞かせてもらおう、だなんて。わたしの村の人よ」

「どこに住んでる？」

「どこって……。ウラルにいるわ。そのうち、わたしを迎えにくるわ」

「なにをしている男なんだ？」

「なにして、機械工よ」

「ずっと前からの知り合いなのか？」

「同じ村の出身だって言っただじやない」

「それなら、どうしていままできみと結婚しなかったんだ？」

「まだそういう歳じゃなかったから、それでしなかったのよ」

「じゃ、いまはもう、身を固めることにしたのか？」

「彼は、もう三十よ。すごいお嬢様たちと付き合っていたのよ……」

「彼が好きなんだね？」

「ええ、好きよ……」

「じゃ、なぜばくとつきあってるんだ？」

「なぜ、なぜって、そんなことばかりきいて……。わたしだって羽を伸ばしたいわ。まるで警察の取り調べみたいで、やな人ね！」

「彼はいつ来るんだい？」

「あしたよ」

「じゃ、これからはもう会えないんだね？」

「結婚式に呼んであげましょうか？ 彼はすごい力持ちよ。ひと突きされたら、あなたなんて、すっ飛んじやうわよ」

「それはどうかかな」

「まあ、まあ……」

「でもきみは、妊娠してるんだろ」

「だがそんなこと言ったの？」

「きみが言ったじゃないか」

「そんなことちつとも言ってないわ。あなたが思い込んだだけよ」

そつとドアをたたく音がした。カーチャは、マルーシャにドアを開けてやると、また横になった。

「見送ってきたわ」。マルーシャは明かりをつけた。「お茶、召し上がる？」

サーシャは、ズボンをはこうと手をのばした。

「どうしたの？ 気にしないでいいのよ」とマルーシヤは言った。

「この人、はにかみ屋なのよ」。カーチャはくすつと笑った。「わたしとつきあうのを恥ずかしがっているくせに、結婚したいんですって」

「結婚はあつという間のことだし、離婚もあつという間のことだわ」と、マルーシヤは言った。

サーシャは、コップにウオッカの残りを注いで、ピローグをつまみに飲んだ。彼はそもそも、なにもかも首尾よく終わつたことをカーチャに感謝しなくてはならない。機械工というのは、事実いるのだろうか、そ

んなことはどうでもいい。いまましいのは、彼女にまたからかわれて、馬鹿みたいにしよげこんでしまったことだ。サーシャは立ちあがった。

「どこへ行くの？」と、カーチャがきいた。

「家に帰る」

「ま、そんなこと」。マルーシヤがあわてて言った。「今晚はここに泊まって、朝お帰りなさい。わたしは隣で泊まるんだし、遠慮しなくていいのよ」

「帰らなくちゃ」

カーチャは浮かぬ顔をした。

「道、わかる？」

「迷子にはならないさ」

彼女は、彼を引き寄せた。

「泊まっていきなさいよ」

「帰るよ、それじゃ」

それでも、やはりいい娘だ！ 残念でない、といったら嘘になる。彼女のほうから電話してこなければ、もう会えないことになる。住所は知らないし、「おばさんに叱られるから」と、教えてくれなかった。おまけ

に、「出入口をうろちよろするんでしょ」といって、どこの工場で働いているかも教えてくれようとしなかった。

以前は、彼女はたまに公衆電話から電話をかけてきて、ふたりは映画館か公園に行き、それからニスクーチニイ公園の奥の方へ足を延ばしたものだ。月明かりにズック製のデッキチェアが白く浮かびあがり、カーチャは顔をそむけた。「なんてことするの……。しつこいわね……。そしてサーシャにもたれなかった。唇は乾いて荒れていた。ざらざらした手で、彼の髪をもてあそんだ。

「わたし、あなたにはじめて会ったとき、ジプシーかと思ったわ。あなたみたいな黒い髪をしたジプシーたちが、わたしたちの村の近くによく来てたのよ。でも、あなたは肌がすべすべしているところは違うのね」

夏、サーシャの母親が、彼女の姉の別荘に行っていたとき、カーチャがサーシャの家に来たことがあったが、玄関わきに座っていた女たちに気まずい思いをさせられて、怒りの色を目に浮かべていた。「じろじろ見られたわ。もう絶対に来るのですか」

電話をかけてきても、黙っているのがふつうで、それから受話器を置き、またかけなおしてくるのだった。

「カーチャだろ？」

「わたしよ……」

「どうして返事しなかったんだ？」

「電話なんかしやしないわ……」

「会おうか？」

「どこで会うつもり？」

「公園のわきは？」

「公園なんていや……デエーヴィイチエに出てらっしゃいよ」

「六時、それとも七時？」

「六時なんて間に合いっこないわ……」

いまになってサーシャはこうしたことをなにもかも思い出し、彼女の電話を待っていた。明くる日は、もしや電話があるのではと、大学からできるだけ早く帰宅したいと思っていた。しかし、十月革命祭に向けて、壁新聞作りをするため大学に残った。そしてその後、党事務局会議から呼び出しを受けた。

ドアの近くには、空席はなかった。サーシャは、きゆうくつそうに座った人びとにぶつかりながら、椅子の列と列のあいだのすきまを通っていった。党事務局書記のパウリンは、こちらに不機嫌そうな視線を向けていた。がっしりした体格の、亜麻色の髪のパウリンは、丸々とした、特徴はないが、気の強そうな顔をしていた。ブルーのサテンの、斜め襟のシャツを着て、短い首のところに白いボタンを二つとめ、幅のある厚い胸を突き出して座っている。サーシャが隅のほうに腰を下ろしたのを見届けると、パウリンは、クリヴォルーチコのほうへ向き直った。

「クリヴォルーチコさん、あなたのせいで、寮の建設は頓挫したのですよ。だれも、客観的な事情など問題にしません。基金は突撃建設のほうへまわされていた、ですと？ あなたが担当しているのは、南ウラルの製鉄工場、マグニートカの建設ではなくて、この大学のことなんですよ。なぜ、期限をまもるのは不可能だと、予告なさらなかったのですか？ そうですか、期限内に終わらせることはできるはずだったと……。なぜ実現できなかったのです？ あなたは、二十年の

党歴をお持ちですって？ 過去の功績に対しては深い敬意を表しますが、過ちはたたかねばなりません」

パウリンの語調にサーシャはびっくりした。副学長のクリヴォルーチコに、学生たちは畏怖の念すら抱いていた。大学では、いまだに軍服に乗馬ズボン、長靴といういでたちの彼の華々しい軍歴が語りぐさとなっていた。この猫背の、高い鼻をした、眼のしたに隈のある陰鬱な人物は、だれとも言葉を交わすことなく、挨拶されても、いつも軽くうなずくだけだった。

椅子の背に手を置いたクリヴォルーチコの指がぶるぶる震えているのがサーシャの目に入った。いつもあれほど恐れられていた人物の凋落の姿はあわれだった。しかし、建築資材が供給されなかったのは事実だった。だがいまや、だれもそんなことにはお構いなしだった。サーシャの学部の学部長、冷静なラトビア人のヤンソンだけが、学長のグリンスカヤ女史に向かってとりなすように言った。

「期限をもう少し延ばしてはどうでしょうか？」
「とおっしゃいますと？」。不気味な善良さのこもった声でパウリンがきいた。

グリンスカヤはおし黙っていた。こんなろくでもない部下を持たされて、とむくれ顔で座っている。背の高い、恰幅のいい大学院生のロズガチョフが立ちあがって、大げさに両手を広げて言った。

「まさかシャベルまで、マグニートカ送りになっていったというのではないでしょう？ 学生たちは凍った地面を指でほじくったというのですか？ ちょうどここにクラスのコムソモールオルグが来ていますから、彼らがシャベルなしでどうやって作業したのか語ってもらいましょう」

パウリンはサーシャを興味深げに見つめた。サーシヤは立ちあがった。

「ぼくたちはシャベルなしで働いたりしていません。いつだったか、物置がしまっていたことがありました。あとで物置番が戻ってきて、シャベルを受け取りました」

「諸君は長いこと待ったのですか？」。うつむいたままクリヴォルーチコが尋ねた。

「十分ほどでした」

サーシヤを証人に立てて、当ての外れたロズガチョ

フは、あたかも失策をやらかしたのは自分ではなく、サーシヤであるとは非難するように頭を振った。

「それで一件落着いたというのですか？」。パウリンが冷ややかに笑いながらきいた。

「ええ、そうです」と、サーシヤは答えた。

「ところで、諸君はどのくらい働いたのですか、どのくらいなにもしないでいたのですか？」

「資材はありませんでしたから」

「きみはどうしてそういうことを知っているのです？」

「みんなが知っていることです」

「パンクラトフ君、弁解しても無駄ですよ。場違いな発言だ！」と、厳しい口調でパウリンがきめつけた。クリヴォルーチコの方を努めて見ないようにしながら、党事務局員たちは、彼を党から除名する票決をとった。棄権したのはヤンソンひとりだった。

猫背の背をさらにかがめて、クリヴォルーチコは部屋から出ていった。

「アジジャン助教授から要請が出ています」と、パウリンは言って、パンクラトフ君、今度こそ言い抜け

はできないぞ、というようにサーシャを見つめた。

アジジャンは、サーシャのクラスで社会主義会計学の基礎という講義をしていた。しかし、その講義は、会計についてでも、基礎に関してでもなく、その基礎を歪曲している人びとについての話だった。サーシャは、会計そのものに関して教えてくれてもいいのではないかと面と向かって言ったことがあった。そのときは、縮れ毛の古狸のアジジャンは笑っておきながら、いまとなって、サーシャは会計学のマルクス主義的基礎に反対したと弾劾しているのだ。

「事実そういうことがあったのですね?」。パウリンはサーシャに冷たい青い眼を向けた。

「ぼくは、理論が不要だなんて言っていない。会計に関する知識をばくたちは得られなかったと言ったのです」

「科学の党派性ということに、きみは関心がないのですか?」

「もちろんあります。でも、具体的な知識にも関心あります」

「党派性と具体的なもののあいだに、相違があると

言うのですか?」

「またはロズガチョフが立ちあがった。」

「同志諸君、なんということでしょう……。あからさまに科学の非政治性が論じられたりすると……。しかも、パンクラートフは、党事務局に対してクリヴォルーチコ氏に関する自らの特殊な見方を押しつけようとし、広範な学生大衆の代表者面をしている。いったいパンクラートフ君、きみは、はっきり言って、どういう連中を代表しているんだ?」

ヤンソンは、顔を曇らせて、ぎっしり詰まっている書類カバンを太い指でたたいていた。

「諸君、行き過ぎがないように!」

グリンスカヤは、パウリンに向かって言った。

「コムソモール組織に、この件はゆだねてはどうでしょう……」

その疲れたような声の調子には、下らない問題だ、たかが一学生のことと、といった人を見下すようなものがあつた。ロズガチョフは、パウリンの顔色をうかがった。彼は、パウリンはグリンスカヤの提案に不満なはずだと思つて、こう言つた。

「党事務局は、この問題を回避すべきではない……」
うかつなこの発言で、ことは決まってしまった。

「だれも回避しようなどとしていない……」。パウリンはしかめ面をして言った。「しかし、順序というものがある。コムソモールに検討してもらおう。コムソモールの政治的な成熟の度合いを見せてもらうことにしましょう」

洋服掛けに茶色の革コートがぶらさがっていた。マルク叔父さんだ！

「遊んできたのか？」

サーシャは、なめらかにひげを剃ったマルクの頬にキスした。マルクは、母が「心地よい独身男の香り」と呼んでいる上等なパイプ煙草とほのかなオーデコロンの香りをさせていた。マルクは太った、快活な、はげかったおっさんで、じつさいの三十五歳という年齢よりも老けて見えた。しかし、黄色っぽい眼鏡のレンズの奥にある鋭い眼を見れば、彼が鉄のような強固な意志の持ち主であることが知れた。工業部門の指揮官のひとりである彼は、東部の巨大建設が伝説的な

と同じぐらいに伝説的な人物でもあった。この新しいソ連の鉄鋼基地は、敵国の航空隊の手の届かない、プロレタリア国家の戦略的後方であったのだ。

「いくら待っても帰ってこないし、どこかに泊まったんじゃないかと思ってたよ……」

「サーシャはいつだって家に帰って寝てるわよ」と、母が言った。

テーブルには、ポートワイン、赤みを帯びた上等なソーセージ、燻製鰯の油漬けに、いつもマルクが土産に持ってくる『トルコのパン』という菓子が載っていた。それに、母が「特別なとき」にいつも作るピロウグも並んでいた。マルクは、家にくるとまえておいたらしい。

「長くいる予定？」

「あした帰る。まったくのトンぼ帰りさ」

「スターリンに呼び出されたのよ」と、母が言った。

彼女は弟を誇りとし、息子も誇りとしていた。それ以外に自慢できるようなものは、夫に捨てられた、孤独な彼女には、なにもなかった。背の低くて太った彼女は、いまでも色白の美しい顔をした、豊かに波打つ

銀髪の持ち主だった。

マルクは、ソファアのうえの包みに手を延ばして言った。

「開けてごらん」

ソフィア・アレクサンドロヴナは、結び目をほどこうとした。

「こっちにかしてごらんよ！」

サーシャは、ナイフでひもを切った。マルクは姉への土産として、コート用の生地とモヘヤのスカーフを持ってきた。サーシャへの土産物は、紺色の薄手のラシャ地の背広だった。ちょっとしわの寄った上着は、サーシャにちょうどぴったりのサイズだった。

「まるであつらえたみたいだわ」と、ソフィア・アレクサンドロヴナがほめた。「マルク、ありがとう。サーシャにはまともな服が一着もなかったのよ」

サーシャは、満足気に鏡にうつった自分の姿を点検した。マルクはいつも、こちらがまさに必要としているものを贈ってくれるのだった。子供のころ、サーシャは叔父に靴屋へ連れていかれて、クローム革の長靴を縫ってもらったことがあった。それは、近所の子供

たちも、学校の友達も、だれも持っていないような立派な長靴で、そのころのサーシャの自慢の種だった。その長靴においても、鼻をつくような靴屋の店先の革やタールのにおいも、いまだに忘れられない。

その晩、マルクには何回か電話がかかってきた。低い威圧的な声で、彼は、資金や資財の割り当てや輸送貨車について命令を下し、アルバートに泊まるので、翌朝八時に車を回すよう命じた。部屋にもどると、マルクはぶどう酒のびんを横目で見て言った。

「ほほう！」

「飲め、友よ、飲める間に、人生の悲哀を忘れて」と、サーシャはマルクのお気に入りの歌を歌いだした。その歌は、むかし、まだ子供のころにマルクから聞いたものだった。

「静かに、ほら静かに、今宵すべてのわずらいは去り行く」とマルクもつられて歌った。「こうだったっけ？」
「その通り！」。サーシャはまた歌いだした。

明日、この時間に
ここにチェーカーが来るかも知れぬ